



# 早稲田大学 立川稲門会会報

2020年12月20日  
第25号

発行 立川稲門会  
編集者 小林和雄  
事務局 立川市富士見町  
2-36-43

<http://tachikawatomon.com>

## コロナ禍の一年

### 稲門会活動を振り返る



会長 小林和雄

令和二年の年明け恒例の「新年会」開催後、降って沸いたコロナの感染拡大で、続く「観桜会」「納涼会」も中止となってしまいました。

こうしたコロナ禍の影響で、計画していた稲門会活動は断念しましたが、予想しなかったいくつかの成果をみる事ができました。その一つは、リモート会議を活用して役員同士の意

思疎通がはかれたことです。場所や時間にしばられず、話ができるなど――、中学生時代アマチュア無線に熱中していた私には思ってもみなかったことでした。

さらに今年度事業計画の一つ、「会員名簿の整備」が進んだこともコロナ禍での成果といえます。これまで古い名簿をもとに少しずつ整備していたのですが、新しい会員情報を確定する

ことはできませんでした。そこで、ITに精通した小宮山・原田両氏のご尽力により、全会員へ最新の情報アンケートを募り、その返信をもとにしてデータの整備ができました。

併せて、「現役早稲田大学生への学資支援」を会員に呼びかけたところ、多くの方々から募金が集まり、大学へ寄付することもできました。また、この会報を発行にあたって、新名簿を活用して原稿募集を行い、充実した誌面づくりが出来ました。

とは言え、やはり会員同士の交流を深めることが、稲門会本来の目的です。一日でも早く、皆さんと顔を合わせて語り合い、我が母校の校歌や今年注目された「紺碧の空」を一緒に歌える日が来ることを願っています。

最後に一つご報告があります。このコロナ禍の中、去る一〇月一〇日、たましりんリッスルホール第一会議室にてコロナ感染防止の対策をとって「第四七回定時総会」を開催しました。会員の出席は二五名。宮木（副会長）議長の進行で

- 議題1 一九年度活動報告
- 議題2 一九年度会計報告
- 議題3 一九年度監査報告
- 議題4 二〇年度活動計画
- 議題5 二〇年度予算

が、全員賛成で可決されました。



全員マスクをして行なわれた「第47回定時総会」

## 特集1

# 溝口敦のライター人生 「ヤミ社会の暗闇」をえぐる

「溝口 敦」とは立川稲門会員 島田敬三さんのペンネーム。 島田さんは昭和四〇年政経学部を卒業後、出版社に勤務。その後フリーライターとして、暴力団山口組の内部抗争をテーマにした著書を多数出版。現在も、ヤミ社会に最も詳しい社会畑のライターとして活躍中です。特集で、島田敬三さんがその半生を語ります。

### プロローグ

現在、講談社のPR誌「本」で「喰うか喰われるか」私の山口組体験」という連載が続いています。この九月号で八回目になり、来年春には一冊の本にして講談社から出す予定です。この連載が「なぜウラ社

会物をテーマとする著作が多いのか」という私への疑問の答えになると思います。ここでは簡単に私の経歴を綴ってウラ社会物とのクサレ縁をご説明しようと思います。



### ライターのスタート

昭和四〇（一九六五）年、政経学部を卒業したものの就職試験で受けた出版社はすべて不合格、唯一拾ってくれたところが徳間書店でした。同社は「月刊TOWN」という雑誌を一年後に刊行の予定で、私は

その創刊準備室に配属されました。創刊二号目で、関東ではあまり知られていない山口組を扱おうとなり、私が担当になりました。つまり編集長が執筆をお願いしたライターのお供をし、

神戸での取材や帰京後の執筆でお世話をしたのです。ところが、編集長はライターの原稿が気に入らず、「代わりにお前が書け」と若い私を代打に立てました。私は会社でまずまずの書き手だったので、八日間ホテルに缶詰めになり、どうにか八〇枚の原稿に仕上げましたが、これが読者に好評でした。

しかし、編集長は社長と喧嘩し、徳間書店を飛び出してしまいます。私は結婚を控え辞めたくなかったのですが、編集部と同僚が「お前も辞めろ」と引っ張り、引きずられて私も辞

め、とりあえずTOWNに掲載した八〇枚を約三五〇枚に膨らませ、「血と抗争」という本を三一書房から出しました。私の処女作です。

### フリーライターに 転身

これが売れました。印税で結婚式もできたし、親の敷地の片隅に小さな新居さえ建てられました。私は本を書けば売れると思いつきました。

しかし、次に書いた歴史小説「反乱者の魂」小説大塩平八郎」も、その次に出した「池田大作 権力者の構造」もさっぱりでした。それでヤクザ物というマーケットがある、ヤクザ物なら売れる、と学習しました。

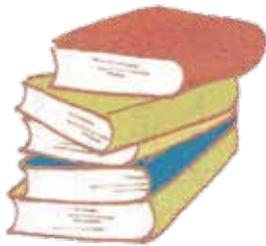
五年間ぐらいフリーの生活を続けましたが、子どもも生まれるし、生活を立て直さねばと思い、博報堂にアルバイトを探しに行きました。が、バイトはないが、正社員ならあるということで、サラリーマンに舞い戻りです。腰掛け入社のもりでしたが、ぬるま湯のよさに七年四カ月も在社し、女房の勧めもあって一九八〇年、またフリーに戻りました。

清水の舞台から飛び降りるつもりで会社を辞めたのですが、案に相違してフリー生活は順調でした。営業などせずとも仕事が絶えません。創価学会問題とか山口組対一和会抗争とか、私が見聞きする分野で次々問題が起き、執筆を依頼されました。私は主要な雑誌のメインライターになりました。

### 刺傷事件

あげく一九九〇年、山口組組長の渡辺芳則氏をひどく批判する「五代目山口組」を刊行し、山口組から刃物で左の脇背を刺されました。深さ五センチ、幅一〇センチという傷でしたが、幸い臓器も神経も傷めませんでした。

私は山口組のことはもう沢山だ、これが最後っ屁だという気持ちでこの本を書き、当然、山口組というマナーは捨てたつもりでした。



社会派ライターとしてヤミ社会を追いつける  
島田敬三さん

### そして映画に

しかし、刺されたことでくやくくなり、幸い光文社カッパノベルスの編集長からエンタメ小説を書かないかと誘われたのを幸い、渡辺組長や宅見勝若頭をおちよくる小説「民暴の帝王」を書きました。案外、好評でした。と、東映のプロデューサー俊藤浩滋氏が訪ねて来て、映画にしたいと言いはりました。

山口組の首脳をケチヨンにした小説ですから映画化は無理と思ったのですが、俊藤氏は関係者を説得し、小

林旭主演で映画にしました。が、宅見若頭が映画化を認める代わりに原作者・溝口敦の名前を外せと俊藤氏に迫り、私はOKしました。

こうして山口組とはその都度、トラブルを抱え、この後の関係も緊張をはらみます。二〇〇六年には軽傷ながら自分の息子まで刺され、私は裁判をして山口組で有力な山健組からお金を取るなど、文字通り「喰うか喰われるか」を繰り返して、いつの間にか「暴力団に詳しい作家」になってしまったのです。

### これが取材者魂

山口組のような暴力団を取材して、怖くないかという質問をよく受けます。自分が攻撃を受けましたから、偉そうなことは言えないのですが、一般的には怖くありません。というのは、私が取材しているのはチンピラ組員ではなく、上層部です。上層部は物分かった人が多く、また自分の話も聞いてほしいという欲求も持っています。真相はこうだったんだと世間知ってほしい。自己顕示欲もあります。多くの場合、取材する側とは利害が一致します。

ただノンフィクションには物事をどう解釈するか、という批判の部分がどうしても出てきます。そこで時にトラブルが発生するので

## 特集 2

# コロナ禍で

# 思ったこと

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、私たちの日常生活は一変しました。そんなコロナ禍のなかでの様々な思いを、寄稿していただきました。

マスク外してください

志村 順子さん

(S40年 文)

**緊** 急事態宣言下に銀行に行った。入り口から数人の案内行員がものしく密になって立っていた。本人確認で免許証を見せた。眼鏡をかけた中年の女性行員が私の顔をみて

「マスク外してください」といった。一瞬嫌な気がしたが、マスクを外した。行員は黙って私の顔を見た。間があいた。それから視線をぐるぐる回し「はい、結構です」と言った。マスクを二月からずっとつけていた。非日常のマスクが日常になりつつあり、顔の半分が見えない人たちが歩いていることが、他人へのリスペクトの証でもあり、一緒にコロナと闘って

いる連帯感でもあるような気がした。

疑わしき顔でマスク外せと言われ、非常時で仕方がないと思いつつも、マスク下の化粧をコロナのせいにしてずっと怠っていた自分に不意打ちを食らったようだった。緊張感があるのに、どこか慣れが出ていた。そんな小さな消化できない時間を積み重ねていたら、外はもう初夏の陽気。新鮮な酸素がたっぷりはじけている。ああ、早くマスクをはずして明るい色の口紅をつけたい。



自分流ライフスタイル

田辺 泰夫さん

(S31年 商)

## 全

世界に広がった伝染病は今まで何度もあったと歴史で習ったものの、まさか自分が生きていく内に起こるとは夢にも思いませんでした。

今年になると新型コロナウイルス騒ぎが毎日に大きくなり、今では毎日の感染者数が三桁になっても驚かなくなりました。高齢者は重症化しやすいらしく、うっとうしい家籠りに堪えています。四月からNHKの朝ドラ「エール」が始まり、いきなり「紺碧の空」が流れたのには驚きました。例えば約七〇年前、早稲田に辛うじて合格し、一年

間の暗い浪人生活から解放されて、あの安部球場での早慶戦で「紺碧の空」に声を枯らして応援した感動がよみがえってきました。

古関裕而さんが早慶戦の直前にこの名曲を作ったことや、早稲田の学生から募集した歌詞だと知り、また感動です。数々の曲（鐘の鳴る丘・長崎の鐘など）は、私の幼少の頃から一緒に歩んで来た道しるべのようです。

体調と天候に合わせて、一日平均六千歩のウォーキング・自分史の完成・新開拓の Pasta 生地作りで、これからも感動と楽しさを求めていきます。





**私** 事で恐縮ですが、コロナ禍のさなかに結婚しました。

三〇代も半ばを過ぎたのに、いっこうに身を固める様子がない私を心配した早稲田の先輩が、結婚相手の女性を紹介してくださったのです。

勤務先の上司が早稲田卒、取引先も早稲田の出身者が多く、さらに結婚相手の紹介まで先輩のお世話になりましたから、人生まるごと早稲田大学に支えてもらっている状態です。大げさに聞こえるかもしれませんが、これほど有難い学校はないと本気で思っています。

す。

さて今回のコロナ禍は、世の中の結婚にどのような影響を与えるのでしょうか。

誰にも予想することができなかつたコロナ禍の襲来によって得た教訓は、「誰もいつ何が原因で窮地に陥るかわからない」ということです。

この教訓を生かすには、家計の担い手が複数人いたほうが良いでしょう。夫婦がともに収入を得て経済的に支えあうなら、家事や育児も分担しなければなりません。男性が外で働いて稼ぎ、女性が家庭において家事育児を担うという慣習は、終焉の時を迎えることになるのかもしれない。



ための人間ドック、野菜作り、地元野菜でぬかみそを漬けるなど、日頃後回しになっていたことができました。決まった時間に起き、食事をし、歯を磨き、運動をして、夜は定時に寝るという規則正しい生活を、普通にやるのが一番のストレス防止対策だと思います。

**い** 私は都立高校の非常勤教員、夫も私立高校で講師を勤めています。オンライン勤務の長女を加え、このコロナ禍で家族と自宅に居る時間が増えました。夫婦が退職(再就職)、子供たちも学業を終えて結婚や仕事に就いたタイミングとも重なり、本当に良かったと思います。

この「家族時間」で家事の大切さを改めて実感し、家族の分業体制や断捨離を進めることなどで、日頃怠っていたことを見直すきっかけになりました。

畳替えや障子張り替え、お菓子作り、健康見直しの

難題に対し、文化庁の参事官として検討や調整に明け暮れていました。

そんな中の人事異動。国立高専を束ねる独法で高専教育の一翼を担うことになり、勤務地も霞が関から八王子高尾となりました。緑豊かな多摩地域は新鮮で、今ではすっかり馴染んでいます。



**コ** ロナの感染拡大でコンサートや演劇など舞台芸術イベントが延期となり、「困窮する団体・事業者・アーティストへの支援をどうするか」という

五年一貫の高専は寮生も四割いるため、校舎内や寮内での衛生対策・三密回避などが必要で、五一校の状況に応じた対面授業の再開に苦慮しました。遠隔(動画)授業は全高専で行われていますが、高専に求められる実践的エンジニアの育成には、実験・実習が不可欠です。遠隔授業と対面授業とのベストミックスで、ウィズコロナ時代の新しい教育のカタチを創造し発信していきたいです。

## 特集 3

## 私のお気に入りの場所 in 立川

立川市の面積は 24.36 km<sup>2</sup>、人口は 184,187人（令和元年5月現在）。住んでいる期間や地域に違いはあっても、みんな立川住人。きっと誰にもお気に入りの立川があるに違いありません。そこで、私だけのお気に入りの場所を 3 人の方にそっと教えてもらいました。あなたも一緒に「お気に入り」を共感してみませんか。



## 玉川上水と小さな喫茶店

古明地 昭雄 (S39年 法)

玉川上水駅近くに住んで約 50 年。四季折々、玉川上水緑道の散策は癒しの日課です。千手橋から上流右岸を数分歩くと、小さな喫茶店「豆きち」があり、マスターが焙煎するコーヒー豆を好んで買っています。緑道に沿って木漏れ日を受けながら帰宅し、コーヒーを淹れます。湯を注ぐとコーヒーがふっくらと盛り上り、芳醇な香りが立ちこめる至福の時です。

多摩川に架かる日野橋からの眺望がお勧めです。富士山の秋の落日は心に染み入るものがあります。山梨の俳人飯田龍太は、「萌えつきし多摩ほとりなる暮春かな」という句で、山梨の山峡から抜け出て東京に入る前の中央線鉄橋からの奥多摩、秩父の連山の美しさを称えています。



## 多摩川から眺める富士山

中村 克久 (S36年 政経)



き血」を上回る作品とはなりませんでした。

そこで、応援部員の伊藤茂が、「いとこの知人に古関裕而という若い作曲家がいる。まだ無名で過去はないけど未来がある」と周囲を説得して回ります。

その熱意が通じ、古関裕而にとっては初めての委嘱作品となる曲が完成しました。発表会の三日前という、まさにギリギリの仕事でした。

できあがった「紺碧の空」は早慶戦の球場に響き渡り、ついに宿敵・慶応を倒し、勝利を手にしたのです。こうして多くの野球ファンが「紺碧の空」を口ずさむようになりました。



WASEDA UNIVERSITY

### 古関裕而の音楽

その後、古関裕而は昭和を代表する国民的作曲家として、数多くの名曲を世に送りだしました。

元々、古関裕而はクラシック音楽を勉強してきたので、流行歌（歌謡曲）などの作曲は苦手だったといえます。独学で学んだクラシック音楽と流行歌との融合が、古関裕而の格調高い楽曲を生んだのでしょうか。

### 珍説「誕生秘話」？

さて、ここからは私の勝手な空想です。

歌曲の王と呼ばれたオーストリアのF・シューベルトの作品に、交響曲第九番「ザ・グレート」という曲があります。因みに交響曲第八番「未完成」は超有名ですね。

この「ザ・グレート」の第一楽章の冒頭で、金管楽器のホルンが朗々としたメロディーを奏でます。これを聴くと、思わず「♪こゝんぺきの、そくら」と口ずさんでしまいます。ひょっとしたら、古関裕而が苦悩の末に「紺碧の空」を作曲した時、この旋律が頭に突然フツと浮かんできただけではないでしょうか？



大隅庭園内にある「紺碧の空」歌碑

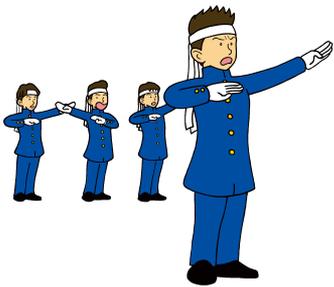
### 早慶による葬送

昭和が終わった平成元年八月一日、古関裕而は八〇歳の生涯を閉じました。

葬儀の日、早慶両校の応援団が「紺碧の空」と「我ぞ覇者」を歌う中、古関裕而の棺は、両校の校旗に送られて永遠の別れへと旅立ちました。

(文中敬称略)

記：岩崎信夫  
(S48年教育)



### 訃報

会員の大岩泰世さんが六月一三日に逝去されました。(享年八五歳)

大岩さんは、昭和三年に理工学部土木科を卒業後、営団東京メトロ株式会社に就職。定年後に立川稲門会に入会され、平成一年から一三年まで立川高校の同期の榎本信行さんが会長の時に、幹事長としてサポートされました。

性格は豪放磊落で音楽・旅・ゴルフをこよなく愛され、特に酒はめっぽう強く崩れることもなく良い酒飲みでした。立川高校OBの紫芳会・営団OB会などで世話役を務め、近年は諏訪神社氏子総代としても活躍されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

